

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17202018
 研究課題名（和文）シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相
 研究課題名（英文）Aspects of Long-distance Trades and Cultural Exchanges in Eastern Silk Road
 研究代表者
 森安孝夫（MORIYASU TAKAO）
 大阪大学・文学研究科・教授
 研究者番号：70157931

研究成果の概要：

近年の日本におけるシルクロード東部地域の歴史に関する研究で特に目立っているのは、5～10世紀頃のトルコ系・チベット系諸民族と東方に進出したソグド人の歴史、並びに13～14世紀のモンゴル時代史である。本研究班の主要メンバーは、そのうちの前者をリードしてきた者たちであるが、内モンゴル・山西・陝西・寧夏・甘肅北部・新疆ウイグル自治区東部における現地調査を踏まえて、さらにその動向を進展させる成果をあげることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
2006年度	9,800,000	2,940,000	12,740,000
2007年度	9,300,000	2,790,000	12,090,000
2008年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
総計	32,100,000	9,630,000	41,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：シルクロード、隋唐、ソグド人、トルコ人、突厥、ウイグル、農牧接壌地帯、文化交流

1. 研究開始当初の背景

明治以来の我が国の東洋学を支えてきた大きな柱は、西域史とか塞外史と呼ばれたモンゴル・チベットを含む中央アジアの歴史と、中国北部において活躍した西域人や塞外民族の歴史であった。しかし1980年代以降、それまで手薄であったイスラム化以後の研究者が急増したのに対し、世界にその名を轟かせてきたイスラム化以前の西域史・塞外民族史の研究者の層が薄くなってきた。如実な例としては敦煌学・トゥルファン学の後継者を育てる大学院の講座が東大・京大から姿を消したことが指摘される。

本研究の代表者である森安は、阪大赴任以来、斯学の再興をめざして微力を傾注し、荒

川正晴を同僚に迎える一方、早稲田大学で後進を育成している石見清裕、中央アジア言語学で名高い神戸市外大の武内紹人・吉田豊と緊密な関係を保ってきた。そこで本研究班を、従来の我が国における中央アジア史学の伝統を継承し、かつ文献研究と現地調査との両面で新しい材料・視点を取り入れながら、国内外の一步先を行く研究手法の確立を試みるために組織した。なお、我々が、モンゴル・チベットを含む中央アジアと、これまで別世界と考えられることの多かった中国北部を合わせて「シルクロード東部地域」と呼んだのは、両者を一体化して、「農牧接壌地帯」をキーワードに新たな歴史世界としてとらえようとしたからである。

現地出土史料のうち 20 世紀初頭に発見された敦煌文書・トゥルファン文書・カラホト文書の多くは、当時のイギリス・フランス・ドイツ・ロシア・日本の探検隊の手でそれぞれロンドン・パリ・ベルリン・サンクトペテルブルグ・京都の所蔵機関に将来された。そして 1950～1970 年代に新中国の手で発掘されたトゥルファン文書は、既に公刊されていた。以上の文書史料については、欧米と日中の研究者によって紹介・研究がなされて、豊かな成果が上げられてきた。我が班の主要メンバーもその一翼を担ってきた。それに対して 1980 年代から、シルクロード東部地域の歴史研究を深化させる遺跡や文物の発見・調査が相次ぎ、研究環境はあらたな展開を見せつつあった。例えば、中国の陝西省・山西省・寧夏回族自治区で発見された墳墓からはソグド人移住者集団の実態を示す図像や文字史料(墓誌銘)がもたらされており、シルクロード東部におけるソグド人のイメージを大きく修正する必要に迫られていた。

2. 研究の目的

本研究は、シルクロード東部地域から出土した墓誌銘・碑文・文書や遺品の原物調査に加え、史跡・遺跡の現地調査によって、シルクロードによるヒト・モノ・情報の移動の実態と、それによって活性化された文化交流や社会変動の諸相を解明することを目的とする。前近代の世界史において大きな役割を果たしたシルクロード貿易について、従来、おおまかに見れば中国の絹織物を筆頭とする奢侈品が大量に西方にもたらされ、逆に西方の金銀器・珠玉・ガラス・琥珀・象牙・香料・薬品・絨毯などの奢侈品が中国に輸入されたこと、さらに言語・宗教・思想などの東西文化交流が促進されたことが判明している。とはいえ、これらは主に中央アジアの「外縁」に残された史料、即ち東の漢籍史料と西のイスラム史料によって引き出された概括的見方であり、その具体相になると実は多くは分かっていない。本研究は、従来の漢籍やイスラム文献のような「外縁」の編纂史料から引き出された概括的見方を越えて、現地出土の多言語の文書を精密に解説・分析することによって、前近代のシルクロード東部地域における多民族・多言語・多宗教の人々の営みが、文字通りシルクロードと密接に結びついていたことを示そうとするものである。

3. 研究の方法

歴史と地理とは密接不可分であるが、我が国では歴史学者や文献学者がデスクワークすることが多い。しかし本研究班ではまず第一にシルクロード東部地域の現地調査、とりわけ景観調査と遺跡調査に重点を置いた。そして、それと平行して、現地より出土した文

書・碑文・墓誌銘などの文字史料と、絹織物をはじめとする遺物の原物調査も重視した。

景観調査ないし遺跡調査は、個人ではなくチームを組んで行なうことによって、大きな成果が期待される。そのために重要なのはチームワークである。それゆえ景観・遺跡・文献・遺物調査の結果を書き留める行動記録の作成にあたっては、代表者である森安がこれまでに蓄積したノウハウに基づき、いかに効率よく、しかも過不足なく情報を収集し、メモを取るかを指導した。しかし実際の行動記録は、部分的に森安が執筆したところもあるが、ほとんどは研究分担者・連携研究者によって執筆・編集されたものである。その成果を各年度の行動記録として集積し、毎年、小冊子に製本して研究班のメンバー全員に配布した。最終年度終了後には、4 年分をひとまとめにして、電子データ版として配布し、今後の各自の研究に備えるようにした。

一方、中央アジア出土文書の言語は多岐に亘るため、従来の各自の研究実績に基づいて、担当を分担した。漢文史料はほとんどすべてのメンバーが扱えるが、重点的には荒川・白須が担当した。ウイグル語は、森安・松井、ソグド語とコータン語は吉田、チベット語は武内、西夏語は佐藤、モンゴル語は松井が担当した。これに対して北中国から出土した主にソグド人関係の漢文墓誌銘は、石見・森部・山下が担当した。ただし、本研究班には若手育成という目的もあり、それぞれに若手の連携研究者が付いて補佐した。さらに今回の研究目的には、出土文字史料と密接に関わる遺蹟・遺物調査が含まれていたが、それを担当したのは考古・美術史専門の服部・藤岡・高橋である。ここでも若手の連携研究者が補佐した。

各メンバーが従来から知られていたものの中から収集した史資料と、今回の現地調査によって得られた成果を合体させ、各自の研究を進化させるために、阪大での中央アジア出土漢文文書ゼミや神戸外大での古代チベット語文書ゼミ、さらに年 3 回開催される研究会「中央アジア学フォーラム」を活用した。

4. 研究成果

以上の目的と方法によって、既に 4 年目終了時点で多大な成果が上げられている。前年度まではそれをまとめて冊子体の成果報告書を作成・提出することが義務付けられていたのであるが、今回からその義務がなくなった。とはいえ本研究班メンバーはそれに替わる市販本の出版をめざしており、この度、そのための準備として以下のような内容の CD-ROM を作成し、メンバー全員が現地調査の成果と各自の研究成果とを共有することとした。なお、本研究期間中に得られた成果で、既に学術誌に掲載されたものは、ここには含

まれない。

第1部：現地調査記録篇

2005年度山西北部・オルドス・寧夏・西安調査行動記録

2006年度内モンゴル・寧夏・陝西・甘肅調査行動記録

2007年度新疆・山西・オルドス調査行動記録（中央アジア班・山西班・オルドス班）

2008年度山西・内モンゴル調査行動記録

第2部：研究篇

日本におけるシルクロード上のソグド人研究の回顧と最近の動向……………森安孝夫
北朝時代後期における長安政権とソグド人……………山下将司

「安元寿墓誌」（光宅元年（684））訳注……………福島 恵

7～8世紀の北アジア世界と安史の乱……………森部 豊

唐代天山東部州府の典（書記）とソグド人……………荒川正晴

唐の内陸アジア系移住民対象規定とその変遷……………石見清裕

新出のソグド語資料について——新米書記の父への手紙から……………吉田 豊

齊周・隋の仏教美術におけるソグド美術の受容に関する覚書……………藤岡 穰

中央アジア出土古ウイグル手紙文書の書式……………森安孝夫

Ordo uluṣ, Solmı, and Beṣbalık ……………P. Zieme

ウイグル語仏典奥書——その起源と発展——……………笠井幸代

西ウイグル時代のウイグル文供出命令文書をめぐって……………松井 太

唐代郷里制在于闐的實施及相關問題研究……………張 銘心

新様文殊壁画に現れる于闐国王とその歴史的背景……………白須淨眞

胡楽器に関する覚書——琵琶を中心に——……………高橋照彦

正倉院・赤漆欄木胡牀と西方のイメージ……………服部等作

4年間の科研費の大半は現地調査に費やされたのであり、踏査地の多くは北中国の農牧接壤地帯であるが、西ウイグル王国の本拠であった新疆ウイグル自治区の東部天山地方にも及んだ。こうした歴史の舞台を踏査することによって得られた貴重な見聞録をまとめたものが、第1部である。これらの膨大な「行動記録」は、今後、メンバー個々人の研究に寄与する大きな資産となるはずであるが、できればそのエッセンス部分を公開して

学界の共有財産にしたいと考えている。

これに対して第2部に収められた諸論考は、シルクロード東部地域の歴史・言語・美術などに関するものである。さらにその半数以上はソグド本国から東方に進出したソグド人に密接に関わっており、近年のソグド研究の高まりをさらに大きく盛り上げる優れた論文が集まっている。各自別々の論文のように見えて、実はそこに大きな共通の問題意識がある。中国で発表される当該分野の研究のほとんどは異民族の「漢化」すなわち中華主義への従属の度合いを論じるものであるが、我々の問題意識はそれとは異なっている。

軍事力と経済力が歴史を動かす大きな要因であった人類の歴史を振りかえれば、遊牧騎馬民族の故郷であり、しかもシルクロード＝ネットワークを包摂していた中央ユーラシアが、世界史においていかに重要な役割を果たしてきたかは、容易に想像されよう。遊牧騎馬民族は銃火器が発明されるまでは地上最強の軍事力の根幹であった騎馬軍団の源泉であったし、シルクロードは「大航海時代」以前の陸上交通中心時代においては諸文明圏を繋ぐ交通の要路であって、それが巨大な経済力の源泉であった。

遊牧騎馬民族が活躍したのは、決して中央ユーラシアの草原地帯だけではなく、中央ユーラシア内部の南辺を東西に貫く農牧接壤地帯もその活動舞台であった。本研究班が今回特に注目したのは、中央ユーラシア東部で最大の北中国の農牧接壤地帯である。すなわち内モンゴル草原地帯の南側に位置し、河北省北部・山西省北部・陝西省北部・寧夏回族自治区・甘肅省にまたがり、農業のための可耕地と遊牧・放牧のための草原とが入り組んでいて、どちらにも利用できる広大な土地のことである。そこは、漢民族とは農耕民・都市民であり、漢民族こそが中華民族（中国人）であるとする立場からは「辺境」というニュアンスを込めて「長城地帯」と呼ばれてきたところでもある。しかしながら漢民族の出自の半分は遊牧民であるとする我々の立場からは、ここは辺境どころかむしろ遊牧民と農耕民の交わる「接点」であり、中国史のダイナミズムを生み出してきた中核部なのである。そしてそこと内モンゴル草原とを合わせた遊牧可能地帯に、匈奴・羯・鮮卑・稽胡・突厥・沙陀・党項・吐谷渾・奚・契丹などさまざまな騎馬遊牧民集団が興亡したことを見れば明らかなように、秦漢＝匈奴拮抗時代から五胡十六国時代を経て、北魏・隋唐・五代に至り、さらに遼・金・元朝へと続く中国史において、草原を本拠地とする遊牧民族は決して客人ではなく、農耕漢民族と並ぶもう一方の主人であったのである。

農牧接壤地帯は、中国諸王朝にとって両刃の剣であり、そこをうまくコントロールでき

たことによって唐朝は前半期の大繁栄をみるが、同じところが今度は安史の乱を支える勢力の揺籃の地となり、さらに五代の沙陀諸王朝（トルコ系）と遼朝（モンゴル系）・西夏（タングート系）という「中央ユーラシア型国家」（かつてのいわゆる「征服王朝」）出現の舞台となった。「万里の長城」は農耕都市民と遊牧民とがせめぎ合ってきた中国史の流れに応じて、この農牧接壌地帯を北上したり南下したりして、揺れ動いてきた。そして農耕都市民と遊牧民の両者が一体化した時、万里の長城は文字通り無用の長物となるのであるが、その最初の典型が唐王朝である。唐代前半には北中国の農牧接壌地帯において突厥人・ソグド人・ソグド系突厥人・九姓鉄勒人などが活躍し、唐後半期から五代には沙陀突厥が歴史の檣舞台に登場する。

森安論文「日本におけるシルクロード上のソグド人研究の回顧と最近の動向」では、我が国の先行研究を整理した上で、本研究班に組織されたメンバーである石見清裕・荒川正晴・吉田 豊・森部 豊・山下将司・中田美絵・鈴木宏節・中田裕子・福島 恵がこの10年間でいかにその実態に肉薄する研究を発表してきたかを解説したが、本研究期間の4年間において、それぞれがさらにその研究動向を進展させる論文を作成し終えたのである（既にこの研究期間内に出版済みのものもある）。さらに藤岡 穰も初めて美術史の側からこの分野に切り込んできた。

一方、ウイグル民族の動向に関しては森安孝夫・P. ツィーメ、松井 太・笠井幸代がそれぞれ成果を上げた。ここに代表者である森安の論文「中央アジア出土古ウイグル手紙文書の書式」についてのみ紹介すれば、それは筆者のライフワークの1つである『中央アジア出土古ウイグル手紙文書集成』の論考篇に当たるものである。その集成本体では約200件に及ぶ手紙を収めている。人の移動こそが文化交流や新しい文化の勃興を促進する。前近代社会にあって、人の移動を容易にしたのは商業と宗教活動である。しかも往々にして両者は緊密に結び付いている。その結果、宗教經典類のみならず一定の書式を持つ世俗的な手紙文や契約文書に、異民族間の文化交流の跡が刻印されることになった。ここに異言語で残された同種の書式を比較研究する意義がある。中央アジアのウイグル文契約文書の書式研究については、既にそれなりの研究蓄積があり、その主流が「漢文→ウイグル語→モンゴル語」だったことは判明している。それに対して手紙文の書式については、比較研究はまだ緒に着いたばかりであり、森安の集成とその論考篇は今後の研究のための基盤を提供するものである。ただ本稿で得られた概略を述べれば、ウイグル語の手紙にはソグド語の手紙書式からの圧倒的な影響

が見られ、また部分的にはウイグル語がモンゴル語に影響を与えたことが看取されたから、手紙書式の大きな流れは、「ソグド語→ウイグル語→モンゴル語」であると考えられる。それは「ソグド文字→ウイグル文字→モンゴル文字」という流れとぴたりと符合する。

以上、本研究班メンバーが達成した成果のうち、特に近年の学界で注目度の高いソグド・ウイグル両民族ならびにソグド系トルコ民族（ソグド系突厥、ソグド系ウイグル等）に関わるものに焦点を当てたが、これらはいずれも彼らがシルクロード東部地域においてどのような政治的活動を行なったか、あるいは彼ら相互の間や漢民族をはじめとする異民族との間でどのような経済的・文化的交流を持ったのかを追及したものである。その結果は、言うまでもなく、中国史を中華主義の呪縛から解き放つのに役立つ内容となっている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 61 件）

① MORIYASU TAKAO “Japanese Research on the History of the Sogdians along the Silk Road, Mainly from Sogdiana to China.” *Acta Asiatica* 94, pp. 1-39, 2008, 査読有。

② MORIYASU TAKAO “Epistolary Formulae of the Old Uighur Letters from Central Asia.” *Acta Asiatica* 94, pp. 127-153, 2008, 査読有。

③ 森安孝夫 「唐代における胡と仏教的世界地理」『東洋史研究』66-3, 2007, pp. 1-33, 査読有。

④ 森安孝夫 「西ウイグル仏教のクロノロジー——ベゼクリクのグリウンヴェーデル編号第8窟(新編号第18窟)の壁画年代再考——」『仏教学研究』第62・63合併号, pp. 1-45, 2007, 査読無。

⑤ IWAMI KIYOHIRO “Turks and Sogdians in China during the T'ang Period.” *Acta Asiatica* 94, pp. 41-65, 2008, 査読有。

⑥ 石見清裕 「唐とテュルク人・ソグド人——民族の移動・移住より見た東アジア史——」『専修大学東アジア世界史研究センター年報』1, pp. 67-81, 2008, 査読無。

⑦ 石見清裕 「沙陀研究史——日本・中国の学界における成果と課題——」『早稲田大学モンゴル研究所紀要』2, pp. 121-138, 2005, 査読無。

⑧ YOSHIDA YUTAKA “Die buddhistischen sogdischen Texte in der Berliner Turfansammlung und die Herkunft des buddhistischen sogdischen Wortes für *Bodhisattva*.” *Acta Orientalia Academiae*

Scientiarum Hungaricae 61-3, pp. 325-358, 2008, 査読有

⑨吉田豊「トルファン学研究所所蔵のソグド語仏典と「菩薩」を意味するソグド語語彙の来源について 百済康義先生のソグド語仏典研究を偲んで」『仏教学研究』第62・63合併号, pp. 46-87, 2007, 査読無.

⑩吉田豊「ソグド人とトルコ人の関係についてのソグド語資料2件」『西南アジア研究』67, pp. 48-56, 2007, 査読有.

⑪YOSHIDA YUTAKA “The Sogdian Version of the New Xi’an Inscription.” In: É. De la Vaissière, / É. Trombert (ed.), *Les Sogdiens en Chine*. Paris: École Française d’Extrême-Orient, 2005, pp. 57-72, incl. 1 pl., 2005, 査読有.

⑫荒川正晴「遊牧国家とオアシス国家の共生関係——西突厥と麴氏高昌国のケースから——」『東洋史研究』67-2, pp. 34-68, 2008, 査読有.

⑬ARAKAWA MASAHARU “Sogdians and the Royal House of Ch’ü in the Kao-ch’ang Kingdom.” *Acta Asiatica* 94, pp. 67-93, 2008, 査読有.

⑭荒川正晴「麴氏高昌国の王権とソグド人」『福井重雅先生古稀・退職記念論集 古代東アジアの社会と文化』東京, 汲古書院, pp. 337-362, 2007, 査読無.

⑮ARAKAWA MASAHARU “Sogdian Merchants and Chinese Han Merchants during the Tang Dynasty.” In: É. De la Vaissière, / É. Trombert (ed.), *Les Sogdiens en Chine*. Paris: École Française d’Extrême-Orient, 2005, pp. 231-242, 2005, 査読有.

⑯藤岡穰「仏像の受容と変容-インドから中国、東南アジアへ-」秋田茂・桃木至朗編『歴史学のフロンティア 地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会, pp. 213-238, 2008, 査読無.

⑰MORIBE YUTAKA “Military Officers of Sogdian Origin from the Late Tang Dynasty to the Period of Five Dynasties.” In: É. De la Vaissière, / É. Trombert (ed.), *Les Sogdiens en Chine*. Paris: École Française d’Extrême-Orient, pp. 243-254, 2005, 査読有.

⑱森部豊「ソグド系突厥の東遷と河朔三鎮の動静——特に魏博を中心として——」『関西大学 東西学術研究所紀要』41, pp. 137-188, 2008, 査読無.

⑲森部豊「四世紀—一〇世紀の黄河下流域におけるソグド人」鶴間和幸(編)『黄河下流域の歴史と環境——東アジア海文明への道——』(学習院大学東洋文化研究叢書)東京: 東方書店, pp. 13-35, 2007, 査読無.

⑳MATSUI DAI “An Uigur Document Preserved in the Library of Istanbul University.”

『内陸アジア言語の研究』22, pp. 61-70, 2007, 査読有.

㉑MATSUI DAI “Six Uigur Contracts from the West Uigur Period (10th-12th Centuries).” 人文社会論叢 (人文科学篇, 弘前大学人文学部) 15, pp. 35-60, 2006, 査読無.

㉒佐藤貴保「西夏用語集に現れる華南産の果物—12世紀後半における西夏貿易史の解明の手がかりとして—」『内陸アジア言語の研究』21, pp. 93-127, 2006, 査読有.

㉓山下将司「唐の監牧制と中国在住ソグド人の牧馬」『東洋史研究』66-4, pp. 1-31, 2008, 査読有.

㉔佐藤貴保, 赤木崇敏, 坂尻彰宏, 吳正科「漢蔵合璧西夏「黒水橋碑」再考」『内陸アジア言語の研究』22, pp. 1-38, 2007, 査読有.

㉕山下将司「隋・唐初の河西ソグド人軍団——天理図書館蔵『文館詞林』「安修仁墓碑銘」残巻をめぐる——」『東方学』110, pp. 65-78, 2005, 査読有.

[学会発表] (計 21 件)

[図書] (計 3 件)

- ① 森安孝夫『シルクロードと唐帝国』(興亡の世界史5) 講談社, 2007. 396 ページ
- ② 吉田豊『コータン出土8-9世紀のコータン語世俗文書に関する覚書』神戸市外国語大学, 2005. 167 ページ
- ③ TAKEUCHI TUGUHITO et al., *Tibetan Documents from Dunhuang*. Old Tibetan Documents Online Monograph Series Vol. 1. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2007. 358 ページ.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森安 孝夫 (MORIYASU TAKAO)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号: 70157931

(2) 研究分担者

白須 淨眞 (SHIRASU JOSHIN)
広島大学・大学院教育学研究科・専任講師
研究者番号: 10330713
石見 清裕 (IWAMI KIYOHITO)
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号: 00176562
吉田 豊 (YOSHIDA YUTAKA)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 30191620
荒川 正晴 (ARAKAWA MASAHARU)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号: 10283699
松井 太 (MATUI DAI)

弘前大学・人文学部・准教授
研究者番号：10333709
高橋 照彦 (TAKAHASHI TERUHIKO)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：10249906
森部 豊 (MORIBE YUTAKA)
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：00411489
武内 紹人 (TAKEUCHI TUGUHITO)
神戸市外国語大学・教授
研究者番号：10171612
服部 等作 (HATTORI TOSAKU)
広島市立大学・芸術学部・教授
研究者番号：50218509
佐藤 貴保 (SATO TAKAYASU)
新潟大学・超域研究機構・准教授
研究者番号：40403026
藤岡 穰 (FUJIOKA YUTAKA)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：70314341
山下 将司 (YAMASHITA SHOJI)
日本女子大学・文学部・准教授
研究者番号：50329025

(3) 連携研究者

坂本 和子 (SAKAMOTO KAZUKO)
国士舘大学・イラク古代文化研究所・共同研究員
研究者番号：10419723
坂尻 彰宏 (SAKAJIRI AKIHIRO)
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号：30512933
平田 陽一郎 (HIRATA YOICHIRO)
沼津工業高等専門学校・教養科・講師
研究者番号：50353280

(4) 研究協力者

田先 千春 (TASAKI CHIHARU)
九州大学・大学院博士後期課程在学
白 玉冬 (BAI YUDONG)
大阪大学・大学院博士後期課程在学
鈴木 桂 (SUZUKI KATSURA)
東京大学・大学院博士後期課程在学
影山 悦子 (KAGEYAMA ETSUKO)
独立行政法人国立文化財機構・東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・研究員
中田 美絵 (NAKATA MIE)
甲南大学・非常勤講師
赤木 崇敏 (AKAGI TAKATOSHI)
甲南大学・非常勤講師
笠井 幸代 (KASAI YUKIYO)
ベルリン科学アカデミー・トルファン研究所・研究員
鈴木 宏節 (SUZUKI KOSETSU)
日本学術振興会特別研究員 (PD)
中田 裕子 (NAKATA YUKO)

龍谷大学・仏教文化研究所・研究員
西村 陽子 (NISHIMURA YOKO)
国立情報学研究所・非常勤研究員
福島 恵 (FUKUSHIMA MEGUMI)
学習院大学・文学部・PD共同研究員
山本 明志 (YAMAMOTO MEISHI)
岡山大学・非常勤講師
齊藤 茂雄 (SAITO SHIGEO)
大阪大学・大学院博士後期課程在学